「心の理論」と社会的場面の理解可能性

——自閉症スペクトラム児への療育場面のエスノメソドロジーにむけて——

‘Theory of Mind’ and Intelligibility in Social Settings:

Toward Ethnomethodological Studies of the Work in Psychotherapeutic
Sessions for Children with Autistic Spectrum Disorder

中 村 和 生 ・ 浦 野 茂 ・ 水 川 喜 文

NAKAMURA Kazuo, URANO Shigeru & MIZUKAWA Yoshifumi

This paper aims to examine “Theory of Mind” approaches and the criticisms of them and to make it clear how these approaches conceptualize the understanding of others and what kind of problem lies inside this conceptualization. Simultaneously, it also intends both to reveal the problems in these approaches with regard to the appreciation of children with autistic spectrum disorder and to provide a perspicuous representation for sociological study in this field.

1. 主題と目的

本稿は「心の理論 (Theory of Mind)」アプローチ (以下、「ToMアプローチ」と略)、及びその批判を検討し、ToMアプローチは他者理解をどのように捉えているのか、そして、その捉え方にはどのような問題があるのかを明らかにする。そして、これとあわせて、自閉症スペクトラム児の捉え方に関する ToM アプローチの問題点を明らかにするとともに、こうした主題に関する社会学研究のあり方についての見通しを得ることを目的とする⁽¹⁾。

ToM アプローチとは「心の理論」——「ある行動を了解したり予測したりする方法として、自分自身や他者に特定の心的状態 (たとえば、信念、欲求、意図など) を帰属させる健常児の能力」[Baron-Cohen et al. 1993=1997: 3] ——を可能にするメカニズムを提唱する、哲学や心理学においてとられる一つの立場である。これは人間一般の普遍的な能力の解明を志すものである一方、この立場から発達心理学の研究、例えば自閉症スペクトラム児の解明なども試みられている⁽²⁾。ToM アプローチは自閉症スペクトラム児を対象とした実験結果を、言わば反射板として用いることで人間の他者理解一般にアプローチしている。他者理解一般と自閉症スペクトラム児の他者理解とは分ち難く結びつけられている。

社会学的観点からすれば、ToM アプローチ及びその批判を検討していくことには二つの意義がある。一つは、社会学の原問題の一つである他者理解を再考する契機となることである。G. ジンメル以来、社会学は他者理解、あるいは自己-他者問題に絶えずアプローチしてきた。一方で、心理学も他者理解を取り扱ってきたわけであり、その一つの姿が ToM アプローチである。このアプローチにたいして社会学はどのような態度をとることができるのかを考えていくことは原問題の新たな側面を描き出してくれるはずである。

今一つは、自閉症スペクトラム児についての社会学的研究に見通しを得ることである。ToM アプローチは発達心理学の領域を中心に展開されており、自閉症スペクトラム児の療育に関しても、心理学の観点から示唆を与えている。この説の批判的検討を通して、自

閉症スペクトラム児を扱う社会学独自の研究のあり方を見いだすことが期待できる。

以下では、まず、ToMアプローチがいかなるものであるかを概観する。そのうえで、それにたいする現象学的批判を検討し、他者理解とはまずは推論に拠らないという主張に着目する。つづけて、ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの立場からなされたToMアプローチ批判を取り上げ、多様な実践の中で日常言語に基づいて他者理解は成し遂げられるという主張を、現象学的批判と多くを共有しつつも、新たな論点を提出するものとして取り上げる。最後に、こうした論点に合致する経験的研究を会話分析研究の中から取り上げ、この領域における社会学的研究がとるべき方針についての見通しを得る。

2. 「心の理論」メカニズムにもとづく他者理解および自閉症スペクトラム児の説明

ToMアプローチとは、人間の他者理解及び自己理解を、心的状態の措定及び、その状態の推論（を通した説明及び予測）から一般的に説明するものである。例えば、自宅で遊んでいる最中に子供が小さな怪我をして出血し、それを見た母親が隣の部屋へと駆けていったとしよう。我々は、母親が消毒薬や絆創膏が入った救急箱を取りにいったのではないかなどと推測するだろう。この時、母親が「心」（この場合、我が子を助けるという意図）を所有するものとみなし、その行動を説明しているのだと、ToMアプローチではみなされる。

ToMアプローチには様々な立場がある。心的状態の措定とその推論は、理論によってもたらされるのか、それともシミュレーションによるのかをめぐって立場は分かれる。まず理論説に立てば、目に見えない他者の「心」の理解は科学理論における仮説形成とその体系化と同じ過程をたどることになる。さらに、この理論が生得的なものであり変更できないものとみなすのか、それとも社会環境における学習の所産であり、科学理論同様に、時には経験によって反証されるなどして発展するものとみなすのかで立場は分かれる⁽³⁾。

一方、心的状態の措定とその推論がシミュレーションによってもたらされるとするシミュレーション説では、必ずしも理論がなくとも、他者の心的状態は説明できるとされる。というのも、人間の意図や推論のヴァリエーションがそれほど多くないこと、及び、人間が仮想的意図を形成できることをふまえれば、仮想的に、つまり心の中で他者の置かれた状況に自分を置いてやることで、その状況において繰り出される行動や意思決定を説明したり推測したりすることができるからである。なお、とくにシミュレーション説においては、このシミュレーションの過程は意識下でなされるとされる場合もある⁽⁴⁾。

このようにToMアプローチは多様性を孕んでいる一方で、共通の前提があり、現象学者S.ギャラガーによれば、それは二つにまとめられる [Gallagher 2004: 199-201]。一つは他者理解における心理主義的な想定である。直接には観察できない他者の心を措定し、その心に何らかの推論を通していかにしてたどり着くのか、という想定をとる点では、どのToMアプローチも異ならない⁽⁵⁾。とくに理論による推論を提唱する説の多くにおいては、自己の心も直接には観察不可能であるとされ、推論に拠らずに入手不可能な自己に関する様々なもの、つまり個人の心理的経験は「デカルト主義的なざわめき (the Cartesian buzz)」 [Gopnik 1993] として、自己理解そのものではないとされる場合もある⁽⁶⁾。こうした心理主義的な想定は、少なくとも他者理解にとっては、たしかに共通のものだと言える。

もう一つは心理主義の普遍性の想定である。第一の想定による他者理解のあり方は我々の日常生活において遍く行き渡っており、他者やその行為の理解にとって不可欠の先行条

件である、ということである。たしかに、ToMアプローチの提唱者たちは自らの理論を多様な他者理解の形式の中での一つの選択肢として扱うことはない。それが他者理解を可能にする本質だとみなされているからこそ、その正確な把握が目指されているわけである。

そして、このような共通の想定をとる「心の理論」は、発達心理学の実験などによって検証されている。そのテストには様々あるが、その一つとして誤信念テストが挙げられる。それは、例えば、救急箱にキャンディを入れ、「他の人が、この箱を見たら、何が入っていると思う？」と子供に尋ねるような、ごく簡単なものである。ある結果によれば、このようなテストに普通の4歳児は85%以上が正解する一方で、それよりも幼い児童の多くが間違える。こうした結果から、世界の現実と人の信念との区別ができるのは、他者の心の状態を措定し、そのあり方が推論できるからだ、と、ToMアプローチは唱えるのである。彼らにとっての課題は、そうした措定や推論が理論によって形成されているのか、シミュレーションによるのか、あるいは別の何かによるのかを明らかにすることとなる。

そして、このような誤信念テストに80%の自閉症スペクトラム児が間違えることも実験によって検証されている⁽⁷⁾。こうした結果から、自閉症スペクトラム児には普通の人間にあるはずの「心の理論」が欠如しており、それゆえに一般的な他者理解を成し遂げることができないという主張がなされているのである。このように「心の理論」メカニズムの検証にあたっては、自閉症スペクトラム児のふるまいが重要な資源となっており、それを対照的に用いることによって、他者理解一般が語られていることにも注意しておきたい。

3. 「心の理論」アプローチへの批判

ここまでToMアプローチの概観を示してきたが、これに対する有力な批判として現象学、及びウィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの観点からなされたものを取り上げたい。現象学の視点からのToMアプローチ批判としては、S.ギャラガーとD.ザハヴィの一連の研究が示唆的である [Zahavi & Parnas 2003 ; Zahavi 2004 ; Gallagher 2001 ; 2004 ; Zahavi & Gallagher 2008]。また、ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの観点からなされたToMアプローチにまつわる研究も多側面にわたっている [Leuder & Costall 2009a]。

これらを取り上げる理由は、第一に、その現象学的批判はA.シュッツ以降の現象学的社会学において洗練されていった自己や間主観性の概念に関わる側面が見受けられるゆえに、社会学における他者理解の再考にとって利する部分があるからである。第二に、その批判を現象学的記述とともに発達心理学の知見を批判的に受容しつつ行っており、誤信念テストの結果の解釈や推論能力を位置づけ直している点で視野の広いものであるからである。第三に、それにもかかわらず、その批判は根本的なもので、ToMアプローチを試みる論者に他者理解の再考をせまるものであり、また、その点においてウィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーによる批判と合致する部分があるからである。さらに重要な点として、この観点からの批判はこの領域の社会学的研究への導きの糸となっているからである。

まずは、現象学的批判のうち、主要な論点二点を検討しておきたい。第一の批判は、誤信念テストは、推論による説明や予測といった三人称的な態度における能力の是非を検討しているが、現実の相互行為は二人称的な態度によってなされるのであり、他者理解に必要なものをテストできていない、というものである [Gallagher 2004 : 204]。三人称的な態度とは観察者としての態度と言い換えられる。先に挙げた「他の人が、この箱 (=キャン

ンディが入った救急箱)を見たら、何が入っていると思う？」という例から考えよう。「他の人」とは、その場にいない人である。そのように仮想された他者について、その「心的状態」を指定し、その認識を予測するということは、一見したところ他者に関わる一つの理解能力を指し示しているように思えるかもしれない。しかし、そのような能力は、現象学によって解明されてきた他者理解の有り様とは大きく異なるとギャラガーは述べる。つまり、日常生活の大半において我々は「実践的かつ評価的な理解様式を含み持つような、他者との相互行為的關係」[ibid. : 202]にあるからである。この関係を離れて観察者としての態度をとるには、相互行為の「外部」に出なければならないことになってしまうだろう。

この態度はシュッツの多元的現実論における科学的理論化の態度と共通点がある。シュッツは、対象にたいして観察者として思考をめぐらせる、つまり、科学的手続きに関する基準に従って思考し、自ら導いた結論にたいしてその前提に立ち返って批判的考察を加え、問題があるとみなせるならば結論やそれに至る途中の判断を取り消してやり直し、その中で検討対象の射程を限定したり拡大したりするといった理論的思惟を方向づける態度を科学的理論化の態度とし、科学者に固有のものとした [Schutz 1962 : 247-248 = 1985 : 訳60]⁽⁸⁾。

重要な相違点は、ToMアプローチはその態度こそが他者理解の本質であるとみなす点である。シュッツは科学的理論化の態度を、至高の現実たる日常生活の態度から飛躍することでもたらされ、「われわれ関係の中で他者たちと生ける現在という時間的パースペクティブ」[ibid. : 訳66]を欠くゆえに、他者との社会関係を全く持たず孤独なものであると特徴づけていた。つまりシュッツにあって、科学的理論化の態度は、日常生活において他者とともにあり互いの行為を織りなしていく際にとられている態度とは相容れないものとして描かれており、他者理解の本質ではありえないのである。

よって、観察者の態度からなされる推論を、他者との第一義的すなわち相互行為的な出逢いを特徴づけるものとはなりえない、稀な他者理解の様式とみなすギャラガーの主張は、シュッツの多元的現実論において類型化された諸態度とその位置づけとも整合する形で、ToMアプローチを批判するものと言える。推論が不要だというのはなく、それらを他者理解の本質として位置づけることが批判されているのである。

第二の批判は、自己理解や他者理解において、内的な経験と外的な行動との弁別的区別、そしてそれゆえに、心と身体との弁別的区別を破棄すべきであるというものである [Zahavi & Parnas 2003]。これは第一の批判の含意を現象学の見地から積極的に展開したものであり、ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの主張とも合致するものである。

ToMアプローチにおいては、自己の心的状態へのアクセス（自己経験）をめぐって立場が分かれていた。それは理論に依らねば入手できないとする立場がある一方で、他者の「心的状態」とは違って少なからず直接に入手できるとする立場があった。しかし、自己経験は内的で他者には閉ざされており、他方で自己の行動は外的なものであり、他者（及び自己）の観察に開かれたものである、とみなされていることは両者に共通する前提と言える。

これに対して、ザハヴィとギャラガーはM.メルロ＝ポンティやM.シェーラーの現象学的研究に依拠して反論を行っていく [Gallagher & Zahavi 2008 : 184]。自己経験が純粹に心的なものであるなら、ある身体を自分自身のものと把握できず、同様に、他者の心的

状態がただただ外的な行動を通すことによってのみ知られうるのなら、それが自己の心的状態と類似すると思う必然性もないことになるはずである。しかし、このような主張は、例えば感覚表現や感情表現の間主観性を考慮するのなら、我々の日常生活における他者理解と相容れない。我々は、自分の足に痛みを感じる際、痛みを心的に認知し、それとは別に足を観察するのではなく、足の痛みを端的に感じる。つまり、心とそれから根本的に乖離した身体などではなく、痛みが具現化された身体だけがある。そして、この具現的身体の理解可能性は他者に開かれている。我々は顔を赤面させる他者を前にすれば、他者の羞恥を端的に理解する。羞恥は赤面に具現化されている。感情や感覚を隠すことは、身体の具現性を前提にして初めて可能になる。具現性が与えてくれる羞恥と赤面の自然な結びつきがあり、それが他者に開かれているからこそ、隠すことを望むこともできるわけである。

もちろん、感覚表現や感情表現の具現性と間主観性によって、自己と他者におけるアクセスの非対称性が損われてはならないことにもザハヴィとギャラガーは注意を向けている。たしかに、我々は他者の痛みを感じることはできないからである。しかし、重要なのは、ここから他者の痛みが自己に閉ざされていることは帰結しないことである。身体の具現性によって、他者の痛みは自己に開かれているからである⁽⁹⁾。

そして、この批判は、ToMアプローチにおける一種の心身二元論的な前提を疑問視するウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーによるToMアプローチへの批判とその主眼を等しくしている [Sharrock & Coulter 2009]。シャロックとクルターによれば、ToMアプローチは、行動主義、デカルト主義と同じように、観察可能なものは「物理的（身体運動）」だけで「心」は観察不可能であるとし、さらに、この観察可能な行動主義的「行動」から、観察不可能な「心」に「推論」によって接近できるという前提をとっている [ibid. : 63-68]。

この「推論」による理解一般への到達という前提への批判は、現象学によるものとは根拠が異なり、日常言語による理解という観点から展開される。シャロックらはG.ライルに依拠し、日常言語において我々は精神と身体を、デカルト主義者が想定するような等位をなすペアの二要素であるかのように語らないと主張する。例えば、我々は道路を歩いている際、「足を上げる」人の行動を観察した後、推論を通してその人が「通りを渡っている」と説明できるようになるわけではない。現に目にしている光景を「通りを渡っている」という記述の下に端的に理解する。さらに重要なのは、この「通りを渡る」という記述の下での理解には意図の理解が既に組み込まれていることである。「通り」に関わる我々の活動に適切に結びつくように日常言語じたいが組織化されており、そうした活動における慣習的な意図は日常言語とともにある。こうした意義で、観察可能な行動主義的「行動」と観察不可能な「心」という区別の設定は他者理解一般の出発点とはなりえず、知らずのうちにそれに依拠するToMアプローチは他者理解一般を間違って捉えていることになる。

シャロックらは、ここからさらなる批判、すなわち、そもそも、理解を問うにあたって、「心的状態」という媒介項を必然的で第一義的なものとして措定する必要はなく、結果として「心的状態」とは空虚な概念であるという批判を展開する [ibid. : 69-73]。この批判は、第一義的な他者理解においては「心的状態」の措定は不要であるとする現象学からの主張をさらに一步超えていくものである。例えば、「悲嘆」「憂うつ」「心配」などの感情に関わる語も、ToMアプローチでは、「通りを渡る」と同様に何らかの心的状態を表し

ているとみなされるが、我々はそれらを推論を経ずに直接理解する。それは心的な語の使い方を学ぶことで可能となる。ウィトゲンシュタインの用語を用いれば、我々は、いわゆる「内的な出来事」を理解するのに「外的な基準」を持ち合わせている[Wittgenstein 1953: sec. 580]。この理解のために、心的述語と脳の状態との指示的で一意的な関係が確立されるのを待ちはしない。誰かを「能なし」であるとか「頭がきれる」と適切に言うためには、脳波をとることとは全く別のことが必要であることが我々にはわかっている。こうして、心的述語にはその使用の規則が秩序だって存在し、その規則による理解には「心的状態」という用語は不要である。この意義で、「心的状態」は空虚であると批判される。

もちろん、この「心的状態」の破棄は他者理解における推論の全面的破棄を帰結しない。シャロックらは、慣習や外的基準からでは心的述語の適用が不明確な場合には推論が必要となる場合があることに言及している。また、シミュレーション説が考える推論を慣習に基づく期待の構造化として捉えるべきであり、慣習の作動には観察不可能な「心的状態」の指定など不要であると論じている。よって、必要なのは、慣習の理解、そして期待された慣習の遂行能力を帰属させる実践ということになるだろう。

以上、本節では、ToMアプローチにたいする批判を三点に分けて検討した。これらによって、ToMアプローチの構成的特性である二つの想定、他者理解における心理主義的想定とその普遍的想定は根本的な疑問を投げかけられたことになる。結果として、全く異なる他者理解観——行動から乖離した心的状態なるものを指定することなく、また、それゆえに推論を介することなく他者理解は行われるという考え方——が導かれたわけである。

4. 現象学的代案：自己自覚（self-awareness）／一次的間主観性／二次的間主観性

さて、本節では、ザハヴィやギャラガーによって現象学的視点に基づき提唱される他者理解及び自己理解の代案を検討しておきたい。それは自己自覚と間主観性という二つの次元で示されている。まずは、自己自覚についてみていきたい。ToMアプローチの一つの立場では、他者だけでなく自己の心的状態の把握にも「心の理論」は不可欠であるとされていた。これに対してザハヴィは、現象学の知見から、いわゆる自己の内省に先行する原初的な形式の自己自覚の存在を挙げている。この非内省的、非推論的な次元の自己自覚は、他者の心的状態の推論能力の獲得に先行するのはもちろん、対象知覚とともにありながらも、それとは別の形式で存在する非知覚的なものである。「対象知覚の経験は一人称的態度の所与性によって特徴づけられるのであり、（中略）一人称的経験は自己への即時的で非観察的なアクセスを自己に差し出している」[Zahavi 2004: 56]とザハヴィは主張する。

そして、この現象学的知見は、乳幼児における自己、他者、世界の分化された認知を経験的に解明した発達心理学の知見によって示されてもいるとザハヴィは述べる⁽¹⁰⁾。例えば、U. ナイサーは、あらゆる知覚が自己とその環境の共通認知を含んでおり、特定の感覚器官にも身体感覚にも還元されえない自己をもたらしとし、それを最も基本的な自己として生態学的自己（ecological self）と名づけている[Neisser 1988: 35]。そして、この自己感覚から乳幼児は、自分の手に届く範囲の対象と範囲外の対象というようにして、対象認知とともに自己感覚を発達させていくという。ザハヴィはこれらの知見を、自己の内省に先行する原初的な形式の自己自覚の存在を指し示すものとして挙げている。

次に間主観性についてみていきたい。とくにギャラガーは発達心理学者トレヴァーセン

の用語である一次的間主観性と二次的間主観性を用い、それを最近の心理学的知見で補強しつつ論じている [Gallagher 2004 : 204-209]⁽¹¹⁾。一次的な間主観性としては他者という存在の認知、その身体動作を通した目的指向性の理解、表情に具現された基本的感情の理解とその表出などが挙げられている。幼児はその環境と関わる中で、生きているものとそうでないもの、そして自己と同種の、しかし異なる身体を持つものとしての他者を区別するようになり、例えば、物体ではなく他者の表情を真似たりする。さらに、他者の連続する身体動作をその目的指向に応じて理解できるようになるという。トレヴァーセンの例ならば、生後3、4週目の乳児は大人が近づいてきて「話しかけて」触ったりすると、大人の目か口を見て微笑むことで反応することが挙げられるだろう [Trevvarthen 1979 = 1989 : 84]。

二次的な間主観性は、一次的な間主観性に基づき、自己と他者とが共在する環境内で共通の指向対象を確立できるようになり、そして、そのことを実践的な文脈において成し遂げられるようになることである [Gallagher 2004 : 207]。例えば、他者が何かに視線を向けたり、指差しをすると、幼児は、それが指すものと他者との視線を交互に振り分けながら、共通の指向対象を確立できるようになっていく。また、他者である養育者がおもちゃの片付けをしていると、自らも加わり、片付けを終わらせるといったように、実践的文脈において他者の目的指向性を理解できるようになっていく [Trevvarthen & Hubley 1978 = 1989 : 133]。

このように、ザハヴィとギャラガーは発達心理学の知見に依りつつ、自己自覚や間主観性を精緻化する。そして、通常状況では共通の世界への共同での参加において自己と他者は過不足なく理解し合っているという趣旨のM.ハイデガーの主張や、他者との出会いとは具現的であるばかりでなく文脈に埋め込まれているという趣旨のA.ギュルヴィッチの主張に言及し、こうした知見が現象学的知見ともある程度は合致すると論じる [Gallagher & Zahavi 2008 : 191]。ToMアプローチの代案をこのように示すことで、自己理解や他者理解という現象が、推論を介在させずに先ずもって成し遂げられており、しかも、それこそが自己と他者が出会う状況において基本的なものであるということが論じられている。

5. 自閉症スペクトラム児という他者の理解をめぐる

この現象学的視点による他者理解観からすれば、自閉症スペクトラム児の振る舞いはどう扱われるのか。彼らはスペクトラムの広範性に譲歩しつつも、発達心理学、脳神経学や精神医学などの諸学の知見を用いて暫定的な帰結を述べている。まず、自閉症児が原初的形式の自己自覚を少なからず持っていることとみなせることが指摘される [Zahavi & Parnas 2003]。自己とその環境の区別や物体の認知が自閉症スペクトラム児に不可能ならば、そもそも誤信念テストなど意味をなさないのだから、これは妥当に思われる。

また、ザハヴィとパルナスは精神科医O.サックスの症例から、一次的間主観性の欠如を推論を通した説明や予測、その一般化などによって補った形で他者理解を成し遂げているとみなせることを主張している [ibid. : 67]。ギャラガーは誤信念テストにおいて、問題となっている人物の知識状態は正しく理解するものの、その人物がそれに基づきどう行為するのかに関しては間違えてしまう自閉症スペクトラム児の事例にまず注目し、感情表現や模倣において困難性があるという、その一般的傾向もふまえて、やはり間主観性の次

元における障害を指摘している⁽¹²⁾。彼らの議論全体から、普通ならば他者の心的状態の推定やその推論を行う能力を獲得する以前に発達する間主観性が自閉症スペクトラム児においては何らかの理由で欠如あるいは障害をきたしており、それゆえ基本的な他者理解が損なわれているという主張が証拠をもって説得的になされていることがわかる。

しかしながら、問題は残る。それは、彼らが提出する証拠が現象学的記述や心理学実験の結果ばかりであることに示唆されている。この点は、シャロックとクルターによる誤信念テストの批判を検討することで明確なものとなる。シャロックらは、誤信念テストに対して、その実験が利用している実践への参加能力をあてにしており、他者理解とは、心的述語一般ばかりでなく参加している実践ごとに解明されるべきである、という批判も展開している [ibid. : 75-87]。この点は、現象学による批判においては二次的間主観性の議論の中に押し込まれることで、十全には展開されえない点であり、極めて重要である。

まず誤信念テストとは、ウィトゲンシュタイン派の観点からすれば、知識と信念に関わる心的述語の概念的区別の一形態、そして三人称主語と信念との結びつけ方に子供が習熟しているかどうかを問うものである。すなわち、「知っている」ことは正しいものでなければならない一方で「思っている」ことは正しさが未確定／不確定であったり、間違っていたりすること、そして、三人称で現れる他者が「思っている」ことの正否はその他者が現に持っている情報からしばしば判断できること、これらへの習熟の如何を問うものである。

しかし、その課題に子供が応じるにあたっては、少なくとも、このテストが利用している実践（「手当をする」「指示をする」「親が子供の世話をする」など）において用いられている概念が子供になればならない、とシャロックらは論じる⁽¹³⁾。すなわち、いわゆる心に関わる語（「思考」「信念」など）は、様々な実践それぞれにおいて、他の言語（「救急箱」「手当」「指示」など）と織り合わさっている以上、心的述語はこうした織り合わせの中において、またそういうものとして問われなければならない。つまり、この批判はToMアプローチが具体的な社会的場面の理解可能性から切り離された形での他者理解観をそなえている点に向けられている。他者理解は、それがそもそも根ざしている、他者とともにある社会的場面における実践において問われるべきものである。シャロックらは、言葉が十全に理解できることには表現を身につけるだけでなく、その言葉が使われている活動に従事できることが含まれるというライルの主張を挙げて、この点をさらに補強している。

そして、この批判は他者理解の解明としての経験的研究を勧めている点で重要である。活動への参加とは、実験において孤独な思考に携わるよう仕向けられるよりも、その活動への習熟者たちとともにある場での実践に共に入ることである。認知的メカニズムの作動ではなく、シャロックらの言葉で表現するならば、多様な実践への参加による文化化(enculturation)、及びそれによる実践の適切な遂行こそが他者理解の成功なのである。個々の実践の丹念な記述、その実践の組織化が解明されてない以上、未だ他者理解はおよそ十分には解明されていないのだ。この批判の論点は「心の理論」一般だけでなく、自閉症スペクトラム児に関わる研究にとっても重要である。心理療法師の回顧録でも発達心理学の実験結果でもなく、自閉症スペクトラム児とともにある場面における実践、及びそこで明らかにされる行為能力の経験的研究が勧められていることになるからである。

したがって、ギャラガーたちが述べる一次的／二次的間主観性がまさに一次的／二次的であるならば、そのこと自体が実験実践だけでなく多様な実践において明らかにされねば

ならない。他者理解は、実践が成し遂げられる状況に埋め込まれている。ギャラガーは一次的間主観性の一つである目的指向性の非推論的理解を「前理論的先駆」とみなすバロン＝コーエンら ToM アプローチの理論説をとる者に対して、非推論的な理解こそがどの相互行為にも遍く一次的なものだと批判しているが [Gallagher 2001 : 83]、現象学的記述や発達心理学などによる実験の結果を超えた例証、すなわち、多様な実践の組織化に埋め込まれたものとしての非推論的理解の例証は行っていない。二人称的な態度を重要視する点から考えても、こうした例証こそが経験的研究としては是非ともなされるべきである。

また、シャロックたちが多様な実践の中でとりわけ学習実践に注目していた点は自閉症スペクトラム児に関わる経験的研究にとって見逃せない。他者とともにある場面において文化化がなされるような実践としてまず挙げられるのは学習である。他者とともに何かを学ぶ際、教わる者と教える者によって場面が構成される場合であっても、行われる行為は例を挙げることに、やって見せること、基本を繰り返すこと、応用することなど多様であり、それが相互行為においてどのような形態をとってなされるのかも多様であるはずだ。自閉症スペクトラム児とともにある場面において、どのように学習がなされ、それによってどのように理解が共同で成し遂げられ、その結果としてどのような行為能力が身についたとされる、すなわちその能力はどう帰属されるのか。文化化とはこうした事柄を注釈しているものであり、この内実を一つ一つ丹念に掘り下げていくことが勧められているのである。

6. 結びにかえて——自閉症スペクトラム児とともにある場面の経験的研究にむけて

以上、本稿では ToM アプローチをめぐる他者理解に関する議論の系譜をいくらか辿ってきた。まずは、それに対する現象学による批判を検討した結果として、このアプローチとは真っ向から異なる他者理解観、行動から乖離した心的状態なるものを指定することなく、それゆえに推論を介することなく他者理解は行われるという考え方に辿りついた。これは社会学にとっても重要である。少なくとも、手段の合理的選択を推論として捉えるならば、それは他者とともにある場面における相互行為の組織化にとって関連性がありすぎる。社会学の行為論における諸主張の位置づけは再考の必要がある。また、シュッツを始祖とする現象学的社会学は行為主体の解釈を焦点化したパラダイムに位置づけられることがあるけれども、推論によらない他者理解という考え方はこの位置づけの再考を促している。

つづいて、ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーによる ToM アプローチへの批判を検討し、現象学的批判が「心の理論」による他者理解を一次的／二次的間主観性によるものへと置き換えたことに意義を見出しつつも、どんな間主観性であれ、他者とともにある場面における他者理解において、そうした他者理解から成るものとして問われるべきであり、また、様々な場面での様々な実践への参加可能性からすれば、何がしかの学習が行われている場面にとくに注目することができる、という経験的研究への見通しを得た。

そして、会話分析の方法を用いた自閉症スペクトラム児の経験的研究には、こうした見通しに合致するものが既にある。例えば、ディッカーソンたちは自閉症スペクトラム児が親など複数の参与者といる日常的場面において、児童が自分の発話の開始時点付近で他者に視線を向けることで聞き手性の確立を促したり、発話だけでは指示対象が不明瞭な指示語を発する際に、同時にその対象に視線を向ける仕方を、C.グッディンやC.ヒースらの知見を手がかりにして解明している [Dickerson et al. 2005]。また、自らが知りたい事柄について知識があると直前のやりとりからみなせるような者を聞き手に最初に選ぶよう

視線を向けている例も挙げられており、シュッツの述べる知識の社会的配分 [Schutz 1962: 14-15=1983: 訳62-63] を児童が理解している可能性が指摘できる。

一方、自閉症スペクトラム児とともにある場面に特徴的なやりとりの連鎖も描かれている。ストリプリングとラエは、自閉症スペクトラム児の療育場面において児童が教師や補助員と緊密な協同のもとに課題を成し遂げていく仕方を、足場 (scaffolding) というヴィゴツキーの概念を手がかりに解明している。その中で、例えば、数えるという課題を児童が行っている順番において、その課題の遂行完了時点で順番の完了を示す、韻律に沿った強勢音を発する。この強勢音で発された発話を課題への答えであると教師はみなし、これに応じて評価を開始していく様子が分析されている [Stribling & Lae 2010: excerpt 10.4]⁽¹⁴⁾。

以上をふまえるならば、エスノメソドロジーにおいて、自閉症と「心の理論」をめぐって、相互に独立して行われてきた理論的研究と経験的研究は共通の焦点を持っていたと言える。すなわち、自閉症スペクトラム児の療育がなされている具体的社会的場面の理解可能性の手続きである。この手続きの解明によって、自閉症スペクトラム児の置かれている社会的状況の一端を明らかにし、さらには、自閉症スペクトラム児を含めて我々が持っている他者理解の多様な仕方を明らかにすることもできるはずである。このような見通しの下、発達障害の養育プログラムの研究に取り組むことが期待できる⁽¹⁵⁾。

付記

本稿は日本社会学会第50回大会での発表「『心の理論』と社会的場面の理解可能性——自閉症スペクトラム児への療育場面のエスノメソドロジー (1) ——」を原稿化したものである。また、本研究は、科学研究費補助金 (基盤 (C)) 「発達障害の療育現場における相互行為の構造：エスノメソドロジー・会話分析による解明」 (代表：浦野茂) の研究成果の一部である。

注

- (1) 自閉症スペクトラムという概念の包括的説明としては [Wing 1996] を参照。この概念の外延は広汎性発達障害とほぼ重なるけれども、ToMアプローチを検討する本稿は、その論者たちの傾向に沿って、自閉症及び自閉症スペクトラム (児) という語を用いる。
- (2) 例えば、[Baron=Cohen 1995=2002] などが挙げられる。また、自閉症スペクトラム以外としては、統合失調症、ダウン症が取り扱われることもある。なお、ToMアプローチが登場する契機となったのは霊長類学の研究 [Premack & Woodruff 1978] であり [鈴木 2002]、他者が誤信念を持つことをチンパンジーが理解しているかが哲学的に問題視された。重要なのは、人間には他者の誤信念の理解力、したがって他者の心的状態の理解力があることが両者の一致点としてあることである。そして、これ以降、この能力の由来に関して諸経験科学における研究が蓄積されていったのは想像に難くない。
- (3) 心の理論を生得的なものとする立場には Baron=Cohen らが属し、生得的ではないとする立場には Gopnick らが属する [Baron=Cohen 1995=2002] [Gopnick 1993]。
- (4) シミュレーション説をとるのは Gordon や Goldman であり、とくに Goldman は意識下のシミュレーションへと向かっている [Gordon 1996] [Gallese & Goldman 1998]。
- (5) 「心理主義」とは mentalism に本稿が与えた訳語である。したがって、その通常の意味、すなわち価値や妥当性といった概念を心理作用として捉える態度とは異なる意味で用いている。
- (6) なお、この点は ToM アプローチを試みる者たちの間で大きな争点ともなっている [Nichols & Stich 2003]。とはいえ、他者の心にたいしてのデカルト的な態度としては、心理主義的想定は共通のものである。また、ローダーと Costall は、この心理主義的想定を (心へのアクセスの) 間接性と (推論を媒介するという意義での) 迂回性に分けて論じている [Leuder & Costall 2009b]。これらの点からの批判はウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの中では一致するものである。

- (7) ギャラガーとザハヴィ [Gallagher & Zahavi 2008 : 174] による。このテストの例は、ToMアプローチで用いられる誤信念テストのうち「スマーティ課題」を利用した。他に「サリー & アン課題」などがあり、どれも他者の誤信念の理解に焦点を合わせている [Frith & Happe 1999 : 3-4]。
- (8) もちろん、科学的理論化こそが科学を固有なものとしているというシュッツの主張は、科学の理解としては問題を孕んだものである。これに関しては、[中村 1999] にて論じた。
- (9) 感覚表現の論理文法を経験的に探究したものとして [前田 2008] を挙げることができる。なお、推論を意識下の過程だとする一部のシミュレーション説にたいしては、少なくとも現在の知見からでは、この意識下の神経システムの作動が、我々が意識の上で明示的に行うことのできる行為の同定（成功や失敗）とどのように関係するのか定かではないと言える。また、この神経メカニズムの説明では、シミュレーション論者が唱えていたシミュレーションが必要ないものとなっている [Gallagher 2004]。いずれにせよ、他者理解の原因ではなく、他者理解という意味生成を主眼とする社会学研究にとっては、この論点は直接的関連性がないため、取り扱わない。
- (10) とはいえザハヴィは、発達心理学者がしばしば、その原初的形式である非内省的自己自覚と、内省などの知覚の対象としての自己とを混同してしまうことを強く批判している。
- (11) なお、トレヴァーセンはintersubjectivityの意味をハバーマスからとって、乳児と養育者の双方の主体性を強調している。そのため「相互主体性」という訳語が与えられているが、本稿では他者理解に焦点を合わせていることもあり、「間主観性」という訳語で統一しておく。
- (12) さらにギャラガーは、間主観性以外のものも含めた様々な障害の神経学的要因として感覚-運動過程の問題とゲシュタルト把握の問題を挙げて包括的説明を行っている [Gallagher 2004]。なお、ローダーとコスタルは、誤信念テストに正解する自閉症スペクトラム児の例に言及しながら、誤信念テストをテストでなく、それ自体が基準構成的であると批判している [Leuder & Costall 2009b]。
- (13) それ以外に、実験実践に関わる理解が必要だろう。すなわち、例に挙げた誤信念テストならば、その場にはいない他者を仮想するだけでなく、その他者に関わる質問を受けて答えることなどである。こうした心理学実験じたいの実践的組織化を扱ったものとして [西阪 2000] がある。
- (14) もちろん、このようにして答えが提示されてIRE連鎖が作り上げられることが自閉症スペクトラム児のいる場面に弁別的に固有ということではない。こうした特徴はいわゆる教室場面におけるIRE連鎖のなされ方と家族的に類似しているし、その場面と共通する連鎖形成の有り様も描かれている（例えば、[Stribling & Lae 2010 : excerpt 10.3] を参照）。とはいえ、いわゆる教室場面との違いがないわけではない。ギャラガーらの主張する自閉症スペクトラム児における一次的間主観性の欠如は、こうした相互行為分析による例証によって確かめられる必要がある。
- (15) この方針の下、自閉症スペクトラム児の生活技能訓練を分析した [Urano, Mizukawa, Nakamura 2011] [浦野・水川・中村 2013]。

参考文献

- Baron-Cohen, S. 1995 *Mindblindness*. MIT Press. 長野他訳『自閉症とマインド・ブラインドネス』青土社 2002.
- Baron-Cohen, S., H. Tager-Flusberg, & D. J. Cohen 1993 *Understanding Other Minds*. Oxford University Press. 田原俊司監訳『心の理論：自閉症の視点から（上巻）』八千代出版 1997.
- Dickerson, P., J. Rae, P. Stribling, K. Dautenhahn & I. Werry 2005 “Autistic Children’s Co-ordination of Gaze and Talk,” Richards, K. & P. Seedhouse (eds.) *Applying Conversation Analysis*. Palgrave Macmillan pp. 19-37.
- Gallagher, S. 2001 “The Practice of Mind: Theory, Simulation or Primary Interaction?” *Journal of Consciousness Studies* 8(5-7): 83-108.
- Gallagher, S. 2004 “Understanding Interpersonal Problems in Autism,” *Philosophy, Psychiatry and Psychology* 11(3): 199-217.
- Gallagher, S. & D. Zahavi 2008 *The Phenomenological Mind*. Routledge. 石原他（訳）『現象学的な心：心の哲学と認知科学入門』勁草書房 2011.

- Gallese, V. & A. Goldman 1998 "Mirror Neurons and the Simulation Theory of Mind-Reading," *Trends in Cognitive Science* 2: 493-501.
- Gopnik, A. 1993 "How We Know Our Minds," *Behavioral and Brain Sciences* 15: 1-14.
- Gordon, L. 1996 "Radical Simulation," *Theories of the Theories of Mind*. Cambridge University Press pp. 11-21.
- U. Frith & F. Happe 1999 "Theory of Mind and Self-Consciousness," *Mind and Language* 14(1): 1-22.
- Leuder, I. & A. Costall (eds.) 2009a *Against Theory of Mind*. Palgrave Macmillan.
- Leuder, I. & A. Costall 2009b "Introduction: Against 'Theory of Mind'," *Against Theory of Mind*. Palgrave Macmillan pp. 1-16.
- 前田泰樹 2008 『心の文法』 新曜社.
- 中村和生 1999 「科学的理論化をめぐる」『年報社会学論集』 12: 234-245.
- 西阪 仰 2000 「相互行為のなかの認識」『文化と社会』 2: 149-175.
- Neisser, U. 1988 "Five Kinds of Self-Knowledge," *Philosophical Psychology* 1: 35-59.
- Nichols, S. & S. Stich 2003 "How to Read Your Own Mind," Q. Smith & A. Jokic (eds.) *Consciousness: New Philosophical Essays*. Oxford University Press pp. 157-200.
- Premak, D. & G. Woodruff 1978 "Does the Chimpanzee have a Theory of Mind?" *Behavioral and Brain Sciences* 4: 515-526.
- Schutz, A. 1962 *Collected Papers I* 渡部他 (訳) 『社会的現実の問題I・II』 マルジュ社1983/1985.
- Sharrock, W. & J. Coulter 2009 "Theory of Mind: A Critical Commentary Continued," Leuder, I. & A. Costall (eds.) *Against Theory of Mind*. Palgrave Macmillan pp. 56-88.
- Stribling, P. & J. Rae 2010 "Interaction Analysis of Scaffolding in a Mathematical Task in ASD," Gardner, H. & M. Forrester (eds.) *Analysing Interaction in Childhood: Insights from Conversation Analysis*. Wiley-Blackwell pp. 185-208.
- 鈴木貴之 2002 「『心の理論』とは何か？」『科学哲学』 35(2): 83-94.
- Trevarthen, C. 1979 "Communication and Cooperation in Early Infancy," Bullowa, M. (ed.) *Before Speech*. Cambridge University Press pp. 321-372. 鯨岡他 (訳) 「早期乳児期における母子間のコミュニケーションと協応」『母と子のあいだ』 ミネルヴァ書房 1989 pp. 69-101.
- Trevarthen, C. & P. Hubley 1978 "Secondary Intersubjectivity: Confidence, Confiding, and Acts of Meaning in the First Year," Lock, A. (ed.) *Action, Gesture and Symbol: The Emergence of Language*. Academic Press pp. 183-229. 鯨岡他 (訳) 「第二次相互主体性の成り立ち」『母と子のあいだ』 ミネルヴァ書房 1989 pp. 102-162.
- Urano, S., Y. Mizukawa & K. Nakamura 2011 "Co-production of Utterances in Social Skills Training for Children with Autistic Spectrum Disorder," Paper Presented at International Committee of EMCA (13th July, University of Fribourg, Switzerland).
- 浦野 茂・水川喜文・中村和生 2013 「社会生活技能訓練における発話の共同産出——広汎性発達障害児への療育場面のエスノメソドロジー——」『三重県立看護大学紀要』 16: 1-10.
- Wing, L. 1996 *The Autistic Spectrum*. Constable and Company. 久保他 (監訳) 『自閉症スペクトル』 東京書籍 1998.
- Wittgenstein, L. 1953 *Philosophische Untersuchungen*. Basil Blackwell. 藤本訳『哲学探究』 大修館 1976.
- Zahavi, D. & J. Parnas 2003 "Conceptual Problems in Infantile Autism Research," *Journal of Consciousness Studies* 10(9-10): 53-71.
- Zahavi, D. 2004 "The Embodied Self-Awareness of the Infant," Zahavi, D., T. Grunbaum, & J. Parnas (eds.) *The Structure and Development of Self-Consciousness*. John Benjamins Publishing Company pp. 35-63.

(青森大学准教授／三重県立看護大学准教授／北星学園大学教授)